



Title	近世浄土宗と蝦夷地〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	宮本, 花恵
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第13399号
Issue Date	2019-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/74556
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Hanae_Miyamoto_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 宮 本 花 恵

主査 教授 谷 本 晃 久
審査委員 副査 准教授 川 口 暁 弘
副査 教授 細 田 典 明

学位論文題名 近世浄土宗と蝦夷地

当該研究領域における本論文の研究成果 本論文は、近世後期～幕末維新期の蝦夷地地域を対象とした文献史学研究、とりわけ宗教社会史、北海道仏教史ならびに浄土宗史の研究領域に属する研究であると位置づけることができる。その成果は、大きく分けて以下のA～Dの4点にあるものと認められる。

A 当該研究領域においてこれまで主要な関心をもって進められてきた幕府の宗教政策・対蝦夷地政策の一環としての「蝦夷三官寺」研究の潮流に対し、浄土宗東蝦夷地ウス善光寺を軸とした個別僧・個別寺院の実証的事例研究を展開した点は、先行研究に手薄かった点を大きく補う結果となった。その際、浄土宗教学史の視点や成果を援用し、教団内部における蝦夷地赴任僧の履歴や法系を詳細に復元し、当時の浄土宗戒律復興の潮流と切り結んで論じた点は、当該研究領域に新たな論点を重厚に提供する結果となった。

B それに加え、「蝦夷三官寺」設置以前における蝦夷地での和人による仏教信仰のかたちを、浄土宗津軽今別本覚寺住職貞伝に対する信仰の蝦夷地への伝播を事例に検討した点は、先行研究を発展的に継承する成果となった。とりわけ、蝦夷地出稼ぎ和人が貞伝の鑄造した万体仏を携行する事例の検討は、具体例を提供した。また、貞伝作仏がウス善光寺に安置された事例への注目も、有効な論点を提示した。一方、貞伝往生伝のテキスト批判により、貞伝渡道説を明確に否定した点は説得的で、研究史に新たな知見を加えた。他方、貞伝信仰の背景に浄土律の奥州北漸があったことを位置付けようとした点は、北海道仏教史と浄土宗教学史とを繋ぐ新たな研究の視座を示した。また、ウス善光寺の刊行にかかる略縁起を手掛かりに、教団による有珠山霊場化の企図を解釈しようとした点も、研究史に新たな課題を提供することに成功している。口頭試問では、これに関連して本論文で提示された、恐山と有珠山を一体として霊場整備がなされたとする概念仮説につき、歴史学のみならず現代的観点からも興味深いとする評価がなされた。

C 蝦夷三官寺は幕府の方針に従いアイヌへの教化を抑制する傾向にあったが、善光寺に関しては積極的なアイヌ布教が確認される点に従来注目が集められ、いくつかの解釈が示されてきた。これに対し本研究では、当時念仏僧として高名を博していた徳本と善光寺2世住職鸞洲との法系上の系譜に着目することにより、念仏布教の一環として、対アイヌ布教を捉える視野を開いた。また、鸞洲の善光寺退院後の知恩院門跡院家就任の事績を実証的に明らかにした点は、これまで注目されてこなかった蝦夷三官寺赴任僧の教団内部での昇階を検証する結果となった。院家就任の経緯を、鸞洲が江戸に招致した徳本の布教を通じた一橋家を介した将軍家とのつながりに求めた点は重要であり、その背景に蝦夷三官寺住職の経歴を見る視点も新鮮であった。19世紀前半の朝幕関係ならびに幕府の宗教統制と、蝦夷三官寺住職の経歴との接点を見る視点が示されたからである。その一方で、善光寺退院後に駿河国富士山麓で念仏布教に専念した唯念の経歴を掘り起こし、善光寺役僧としての経験が与えた影響を検討した点は、教団内での出世を果たし律院の復興を進めた鸞洲とは異なるかたちで戒律復興運動を実践した、個別僧の一類型を示した。これにより、近世浄土宗における山岳念仏僧のなかに、有珠山をかかえる善光寺赴任僧を加えて検討する視座が開かれる結果となった。

D 幕末の開国期に出版された松浦武四郎の「東蝦夷日誌」に載る鷺洲の記事を批判し、そこで叙述され強調される鷺洲のアイヌ教化が、武四郎が幕府に期待した対アイヌ政策と、情報提供者福田行誠の江戸への律院開創計画という、両者の思惑が合致交錯した内容を含むとする考察は重要な指摘となった。19世紀初頭の善光寺での鷺洲の事績が、幕末の浄土宗戒律復興運動ならびに武四郎の希求したアイヌ政策の観点から再評価されていることが指摘でき、そこから同時代におけるアイヌ布教への関心を看取する途が開かれているからである。

総じて、本研究は北海道仏教史研究の本格的専論として須藤隆仙『日本仏教の北限』（1966年）・佐々木馨『北海道仏教史の研究』（2004）を継ぐ位置を占めるとともに、近世浄土宗史、とりわけ戒律復興運動の地域的展開を実証的に示す新たな成果となった。また、近世蝦夷地在地社会における宗教状況を叙述した点は、近世アイヌ社会史にも貢献する仕事となった。審査委員会では、実証された事例の全体史的位置づけや叙述スタイル、あるいは論証の手続きにやや不十分さが見られる点が指摘されたが、口頭試問では今後の研究においてこうした課題を自ら克服し得る意欲や力量が、十分認められた。

学位授与に関する委員会の所見 以上の審査の結果、審査委員会は全員一致して、本論文の著者である宮本花恵氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。